

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01602

研究課題名(和文)日本の女子サッカー選手におけるキャリア形成プロセスに関する研究

研究課題名(英文)Career Developing Process of Female Youth Soccer Players

研究代表者

稲葉 佳奈子 (INABA, Kanako)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：70431666

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：選手のキャリア形成プロセス、キャリア形成に影響を及ぼした環境、キャリア形成に関わる意向などについて明らかにするため、質問紙調査およびインタビュー調査をおこなった。調査から明らかになったのは、スポーツキャリアに依拠しない大学進学志向や、卒業後のスポーツキャリア継続に対する非積極性、キャリア形成におけるチーム指導者の関わり少なさである。併行しておこなった心理学的視点からの分析においても、この知見が支持された。また、選手はスポーツキャリアのゴールを明確にしておらず、彼女たちのスポーツキャリアは目の前の課題をクリアすることの積み重ねによって形成されている現状が示された。

研究成果の概要(英文)：This study puts its focus on how female youth soccer players build their career as athlete. Several questionnaires and interviews about career developing process of them has shown that many of female players don't plan to continue playing soccer as an athlete after graduation. Accordingly, they wish to specialize not in sport science and get a qualification to get a job at an university. Moreover, in contrast to the case of male youth soccer players in previous studies, their soccer coaches are not expected to play a decisive role in their own career building. Many of female youth soccer players don't set a long-term goal as athlete. They are predisposed to the effects of immediate concern about playing soccer.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：女子サッカー スポーツキャリア形成

1. 研究開始当初の背景

アスリートのキャリア形成をめぐる問題は、スポーツ社会学領域では社会化論やセカンドキャリア論、運動部活動論などを通じて論じられてきた。これらは学校から企業・プロへという単一のキャリアパス経路を前提としているが、飯田は学校教育制度と一線を画す環境でのスポーツキャリア形成に目を向け、プロチームへの昇格やサッカー強豪大学への進学など複数の可能性に対してユース年代の選手が重大な判断を下していくプロセスを明らかにした（飯田：2012）。本研究は、飯田の問題関心を発展的に引き継ぎ、対象を女子サッカー選手に広げ、男子選手との比較から特徴や課題を探る。先行研究から蓄積されたデータを活用しつつ、女子サッカー選手のキャリア形成プロセスをめぐる実態を、社会学的視点からの議論にいかにつなげるのか、その理論的位置づけの可能性も追究する。

また、日本の体育学・スポーツ科学において、社会科学領域の女子アスリート研究は、スポーツ・ジェンダー論の視点からスポーツ文化の男性中心主義的特質を批判的に実証する議論が主流である。本研究は、先行研究と問題認識を共有しつつも、そのようなスポーツ文化の内部で女子アスリートがどのように自らのアイデンティティを確立し、どのようなキャリア形成につなげているのかという方向に議論を展開することを目指す。

2. 研究の目的

本研究は、以下の二点について明らかにすることを目的とする。なお、調査結果の考察においては社会学的視点を主としながら、心理学的視点からの考察を加えることでより多角的な知見を得ることを目指す。

1) 日本の女子サッカー選手がどのような認識の下で具体的なスポーツキャリア形成をおこなっているのか、どのような物的環境がどの程度影響しているのか。

2) 女子サッカー選手のキャリア形成において、選手の家庭環境や社会階層はどのように関連しているのか。

3. 研究の方法

平成 27 年度は、理論的枠組みの検討と並行して、選手生活とキャリア形成の実態を把握するためにユース年代選手を対象としたアンケート調査を、女子サッカー選手の日常実践とキャリア形成の関係を把握するために国内女子サッカーチームのフィールドワークを中心的におこなうことを計画した。平成 28 年度以降は、スポーツ活動への投資の実態を把握するために、選手の保護者を対象としたアンケート調査およびインタビュー調査をおこない、選手のアイデンティティとキャリア形成の関係を把握するためにユース年代選手を対象としたインタビュー調査を中心的におこなうことを計画した。

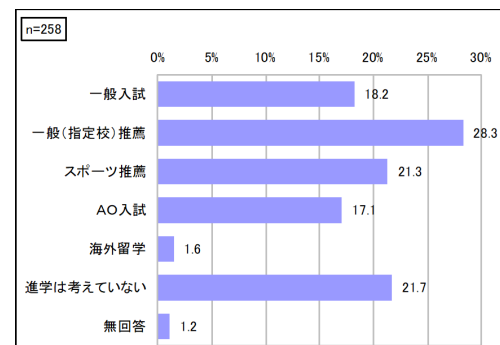
アンケート調査は、全国大会出場あるいは地域予選上位校の女子サッカー部員を対象におこない、サッカーを始めた時期やきっかけ、キャリア継続要因、現所属チームに入った経緯と理由、現在のサッカー環境をどう捉えるか、将来をどう考えているか、環境の変更に際して影響を受けた要因あるいは人物などについて回答を得た。また、インタビューは、全国大会上位進出校の女子サッカー部員およびなでしこリーグ下部組織クラブのユース年代選手を対象に半構造化インタビューをおこなった。

4. 研究成果

1) アンケート調査から

大学生の全国選抜・地域選抜チームおよび高校強豪チームを対象としたアンケート調査から、以下のことが明らかになった。

サッカーを始めた時期やきっかけについて、小学校年代から親・きょうだいの影響がきっかけとなって始めるケースが主流である。Jリーグユースの男子選手を対象とした先行研究と比べて、大学女子選手の方が身近な人間関係の影響を大きく受けていることがうかがえる。



上のグラフが示すとおり、ユース年代の女子サッカー選手において、進学にあたってスポーツ推薦制度などサッカー選手としてのキャリアを活用することはいくつかの選択肢のひとつであり、少なくとも主流とはいえない。また、大学卒業後に現在の競技レベルを維持したままスポーツキャリアを継続することに対する消極的な姿勢が目立つ。それはつまり、ユニバーシアード大会に出場するレベルの選手、そしてインターハイ出場あるいは上位進出をコンスタントに果たしている高校の選手であっても、「サッカー選手であること」を自分の学歴や職業を規定する要素として捉えていないということだといえる。したがってこの結果は、日本女子サッカーの歴史と現状を背景におきつつ、女子アスリートのライフコースにおいてスポーツキャリアがどのような位置づけにあるのかという視点からの分析を要する。

また、高校・大学への進学や卒業後の将来についての相談相手は圧倒的に母親が多く、この年代の女子選手のキャリア形成プロセスにおいてチーム指導者の存在感は希薄で

ある。この調査結果は、先行研究における同年代男子選手を対象とした調査結果と対照的である。

一方、心理学的視点からは、以下のことが明らかになった。

a) キャリア形成について

進路決定を含む悩みの相談相手について、地域選抜では半数以上が学校の友人を挙げているのに対して、全国選抜では3割程度である。サッカーを生活のコアとして位置づけている全国選抜の選手と比べて、サッカーに専心しつつもより広い高校生活を送っていると思われる選手との間に「重要な他者」に関する違いがみられたといえる。

b) 同一性地位について

全国選抜と地域選抜の間では、過去の危機（「私はこれまで、自分について重大な決断をしたことはない」「私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある」など疑問や迷い・決断を問う質問から導かれる）についてのみ有意差が認められた。つまり全国選抜の選手は、それまでのキャリア形成過程において、つねにサッカー中心に進んできており、進路についての大きな迷いや悩み、両親を主とした「重要な他者」との不協和音もなく歩んできたと考えられる。

同一性地位について全体での内訳をみると、同一性地位達成は4%、同一性達成一早期完了中間地位17%、早期完了地位12%、積極性モラトリアム中間地位62%、同一性拡散地位1%であった。本研究で分類した6つの同一性地位の中で、危機を経て現在自己投入の対象をもってるとされる「同一性地位達成」と、現在自己投入をおこなっていないとされる「同一性拡散地位」という両極に注目すると、全国選抜の選手ではそこに分類される選手はいなかった。全国選抜チームの選手は自分自身の進路や同一性にまつわる内容に関して、主体的に重大な決断をしておらず、有意に過去の危機を経験していない。同一性達成地位には危機の経験が不可欠であることから、全国選抜チームの選手はその状態には至っていないと解釈できる。また、現在自己投入をおこなっていない同一性拡散地位については、大学生年代で国内のトップレベルに位置し、高い程度の自己投入をサッカーに向けていると思われる全国選抜の選手はこの地位に同定されないといえる。それに対して地域選抜チームの選手は、所属するチームや進学先の決定等に関して、危機を経験している割合が高い。これまでのキャリア形成過程で自らの立ち位置や将来の可能性を吟味することを経た選手は同一性達成地位に分類され、様々な原因によりサッカーへの自己投入に疑問を抱く状況にある選手は同一性拡散地位に分類されたと考えられる。

2) インタビュー調査から

全国大会上位常連高校の女子サッカー選手を対象としたインタビュー調査から、アン

ケート調査の結果を部分的に裏付ける結果が得られた。特に注目したのは、以下の発言である。

①「「高校サッカー」がやりたかったんです」

②「(卒業後)何になりたいかを決めて、その学部があるところ、プラス、サッカーがあればって思う」

③「なでしこリーグに行くには実力が足りない(だから目指さない)」

①と同様の語りは、複数の選手からえられた。

中学段階で進路を考えるにあたり、「プロ」(女子の場合はなでしこリーグ)を含む将来の職業についてのゴールセッティングから逆算するという発想はみられない。「いま・ここ」において自分の気持ちが最も強く向かう場所として(なでしこ傘下のクラブチームなどではなく)「高校サッカー」があり、自らの意思でターゲットを定め、中学生にできる範囲の行動を自主的に起こす。そのとき、主な相談相手となる親(特に母親)は、具体的な進路選択にあたり積極的な介入はしていない。高校までのチームの指導者もまた、求められた際に情報提供はするものの、キャリア形成に大きく影響したといえるほどの関わり方はしていない。ただし本研究の調査対象となったチームの場合、監督が意識的に将来については早い段階で真剣に考えるよう促している。そのうえで、高校卒業後のビジョンについては②や③のような語りが多く聞かれ、高校部活動の選手とクラブの選手がともに「サッカーをどこまで続けるかわからない」という想定が進路選択に少なからぬ影響をおよぼしていることがわかった。

一方、国内トップリーグであるなでしこリーグで例年上位の成績をキープし、歴史と実力を兼ね備えた強豪チームに所属する大学生選手2名による語りのなかで、特に注目したのは以下の発言である。

①「チームで成績表を見せ合ったりしたけど、行く高校の話はしない。みんな家がバラバラで知らないし」

②「(今の大学を選んだのは)栄養っていうか、ご飯作ったりすることに興味あったから、そういう学校に進みたいなって」

③「(なでしこジャパンに入りたいという長年の夢はあるが)今は、今のことしか考えられないっていうか、そんな先々のことを考えてる余裕がない」

インタビュー対象者となった2名の選手は、多くの女子サッカー選手と同様に小学校時にサッカーを始める。そして中学入学以降もサッカーを継続できる機会と環境を求めて、自ら積極的に動き判断する必要に迫られていた。そのプロセスで「より強いチーム・レベルの高いチーム」が志向されたが、向かう先に具体的なゴールを設定していたわけではなく「今、いかにサッカー選手としての自分を高めるか」という目の前の課題をクリアするための選択の積み重ねであったことがうかがえる。先行研究における同年代男子

選手の場合、将来Jリーグのトップチームに進めるのか、進めないのであればどの大学に入るべきか、そのために必要な準備は何か、といったことをかなり早い段階で検討し始める。そして、そのための情報収集を選手本人がチームメイトと情報提供しあいながらおこなうのみならず、両親やチーム指導者が積極的にかかわっていく。そうした事例と比べて、①からうかがえるとおり、チーム内でも進路の話をはほとんどしない女子選手のありようは特徴的であるといえる。

また、発言②が示すように、両選手とも大学進学にあたり進学先の決め手となったのは「栄養系の勉強ができる」という点であった。しかしそれはサッカーに大学での学びを活かすためではなく、「栄養系」の資格を将来の職業選択に活かすためでもない。むしろ同分野でも資格取得につながる他の大学や専門学校は、「練習に間に合わない」などの理由で敬遠されている。両選手の選択はあくまでもサッカー選手としてのキャリアを継続させるためのものであり、そこに付随して将来の職業選択とは関係なくその時点での趣味・関心にマッチしたものであった。

インタビュー調査全体をとおして、選手たちの「今のことしか考えられない」という状況が確認できた。クラブチームの大学生選手についていえば、大学卒業後もさらにキャリアを継続させるためには、サッカーとは関係のない仕事をして生活を成り立たせることになる可能性が高く、その生活をいつまで続けることになるかわからない。そうした状況では将来の計画を立てることはおろか、想像することも困難である。ただしクラブチームの場合、自分よりも年代が上のチームメイトというモデルケースが存在している。身近なところで学校を卒業してからの在り方が現実として見られるという点は、高校や大学のサッカー選手とは大きく異なっており、選手のキャリア形成に少なからず影響をおよぼしていると考えられる。

以上、一連の調査結果をもとに考察した結果を示した。なお、研究計画段階ではキャリア形成と社会階層との関連を視野に入れた保護者を対象とした調査を想定していたが、期間中の実行はかなわなかった。また、フィールドワークを通じて選手のアスリートアイデンティティとスポーツキャリア形成などとの関連をより深く把握することについても、調査の実行がかなわず課題として残ることとなった。

〈参考文献〉

①飯田 義明、Jクラブに所属するユース選手における進路決定プロセスに関する一考察、専修大学体育研究紀要、48(2)、2012、17-28

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①稲葉 佳奈子、飯田 義明、上向 貫志、高校・大学年代女子サッカー選手のキャリア形成に関する一考察、成蹊大学一般研究報告、査読無、vol.50 No.5、2017、1-17

②上向 貫志、稲葉 佳奈子、飯田 義明、大学女子サッカー選手におけるキャリア形成と同一性の諸相に関する研究、武蔵大学人文学会雑誌、査読有、第49巻、2018 51-63

〔学会発表〕(計3件)

①稲葉 佳奈子、飯田 義明、上向 貫志、日本の女子サッカー選手のキャリア形成プロセスに関する研究、日本スポーツ社会学会第25回大会、2016

②稲葉 佳奈子、飯田 義明、上向 貫志、日本の女子サッカー選手のキャリア形成プロセスに関する研究——サッカー環境に着目して——、日本フットボール学会第14回大会、2016

③上向 貫志、稲葉 佳奈子、飯田 義明、大学女子サッカー選手におけるキャリア形成と同一性地位、日本フットボール学会第14回大会、2016

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲葉 佳奈子 (INABA Kanako)
成蹊大学・文学部・准教授
研究者番号：70431666

(2) 研究分担者

飯田 義明 (IIDA Yoshiaki)
専修大学・経済学部・教授
研究者番号：30297072

上向 貫志 (UEMUKAI Kanshi)
武蔵大学・基礎教育センター・教授
研究者番号：40291661